行 政 視 察 等 報 告 書

令和６年６月24日

長野市議会議長　西　沢　利　一　様

報告者氏名（代表）
建設企業委員会
委員長　若林　祥

この度、行政視察をしましたので、その概要について下記のとおり報告いたします。

記

１　視 察 区 分　　建設企業委員会行政視察

２　視察者氏名　　若林　祥、加藤　英夫、山﨑　裕子、寺沢　さゆり、和田　凌弥、
清水　美加子、和田　一成、本木　晋、黒沢　清一

３　随　行　者　　書記　丸山　宏明

４　視 察 期 間　　令和６年５月13日（月）～ 令和５年５月15日（水）

５　視察先及び視察事項

視　察　先	視察日時	視　察　事　項
愛知県 岡崎市	５月13日（月） 午後２時	・かわまちづくりについて
埼玉県 春日部市	５月14日（火） 午後２時	・首都圏外郭放水路について
神奈川県 大和市	５月15日（水） 午前９時30分	・文化創造拠点シリウスについて

6　調査概要

月日	視　察　地 （市町村名等）	考　　察 （所感、課題、提言等）
5/13 （月）	岡崎市	**【かわまちづくりについて】** **［概要］** 岡崎市は愛知県のほぼ中央に位置し、人口約38万人を擁する中核市である。市内を流れる乙川は、市の中心市街地を貫流し、徳川家康の生誕地として歴史的価値を持つ岡崎城やその周辺の総曲輪（そうぐるわ）など、多くの文化財を抱えている。岡崎市はまた、トヨタ自動車関連の製造業が集積する工業都市としての顔も持ち合わせている。 岡崎市の「かわまちづくり」プロジェクトは、中心市街地を流れる乙川周辺の水辺空間と都市空間を一体的に整備し、市民や観光客の利便性と魅力を高める取り組みである。「乙川リバーフロント地区公民連携まちづくり基本計画」（QURUWA戦略）を通じた、公民連携によるまちづくりは、学ぶべきものが多くある。 QURUWA戦略は、岡崎城を中心とする157haのエリアを7つのサブエリアに分け、行政と民間が協力して地域経済の活性化を図る計画。エリアには、東岡崎駅、伊賀川・岡崎公園、りぷら（図書館交流プラザ）、籠田公園、セントラルアベニュー、乙川の各施設が含まれる。計画では、「市民の暮らしの質の向上」と「エリアの価値向上」を目指し、補助金に頼らない持続可能な開発を推進している。 主要プロジェクトの一つである桜城橋は、乙川を跨ぐ人道橋で、観光客や市民の回遊性を高めるために設計されている。また、乙川河川緑地は親水公園として整備され、花見の時期などは舟の運行も行われている。これにより、地域の観光資源としての価値が高まり、観光客誘致が進んでいる。 QURUWA戦略では、公民連携が重要な要素とされ、市民と企業が協力してアイデアを実現するためのワンストップ窓口が設けられている。デザイン会議を通じて、エリア全体の統一感を保ちながら、各施設のカラーコントロールを行うなど、視覚的なブランドイメージの強化も図られている。 観光客の増加や市民の満足度向上が挙げられる一方で、マンション住民の自治会加入率の低下や、補助金に頼らない運営の持続可能性が課題とされている。しかしこの事例は、他の自治体にとっても参考になる特異なモデルである。 **［考察］** 岡崎市の「かわまちづくり」が持つ魅力とその実践方法を深く理解することができた。特に、公民連携の重要性が強調されており、市民と企業が協力して地域の問題解決に取り組む姿勢が印象的であった。岡崎市の取り組みは、公共サービスの担い手と「新しい公共」を追求する過程を示しており、これは本市にとっても参考になる点が多い。回遊性を高めるために各公共施設や空間が徒歩5分圏内で結ばれている点や、籠田公園の多様な活用方法、そしてデザインの統一などは、住民の利便性を高めるための重要な要素であると感じた。また、PPP方式の積極的な導入により、公園運営事業や拠点形

		成事業が効率的に行われていることも学びの一つである。 興味を持った点として、地元産檜を使用した桜城橋におけるコミュニティ形成の事例である。県職員が毎月橋上磨きを行うことで賛同者が自然と増え、老若男女が掃除を楽しみながらコミュニティを形成している。このような取組みは、地域住民の参加意欲を高め、地域社会の絆を強める良い手本であると感じた。長野市でも市民との連携の仕方や進め方、自治会との連携の仕方など、多くの学ぶべき点が見つかった。 本市でも千曲川において「千曲川北信5市町かわまちづくり」が進行しているが、岡崎市の行政手法や住民の期待や参画意欲を高める仕組みづくりを参考にし、豊かな自然と水辺のアクティビティを活かした新たな広域観光のあり方を考えることが必要であると感じた。また、長野駅から善光寺及び城山にかけてのエリアでは、デザインを統一したまちづくりや、商店街・自治会と連携したまちづくりが活性化やエリアの価値向上につながると考える。岡崎市の事例は、他自治体にとっても参考になる重要なモデルであると強く感じた。
５/14 （火）	春日部市	**【首都圏外郭放水路について】** **［概要］** 春日部市は埼玉県東部に位置し、人口約23万人を抱える都市である。都心へのアクセスが良好で、歴史的な名所や公園が点在し、豊かな自然環境と都市機能が共存している。商業施設や教育機関も充実して、住みやすい環境が整っている。 関東平野の河川は江戸期前半までは縦横無尽に流れていたが、徳川幕府の整備によって現在の形となった。配水勾配が緩やかで洪水被害が発生しやすい地域であり、現代でもその名残が残っている。これらの洪水被害を軽減し首都圏を守るため、春日部市に首都圏外郭放水路が建設された。 この放水路は、倉松川や大落古利根川など5つの中小河川の洪水時のオーバーフロー分を4つの縦坑で受け入れ、内径10.6m、延長6.3kmの導水トンネルを通じて「地下神殿」と称される調圧水槽に導き、4機のガスタービン排水ポンプで江戸川へ排水する仕組みである。建設費は約2300億円にも及び、この施設の規模と技術は世界最大級と言える。 中川・綾瀬川流域は、低地で水が流れにくい地形のため、昔から浸水被害に悩まされてきた。これを軽減するため、首都圏外郭放水路が誕生した。国道16号の地下約50mに建設され、用地交渉が省力できたことで工事期間も予定通りに進んだ。施設に水を取り込むのは年平均7回程度で、これまでに143回の取り込みと80回のポンプ稼働が行われている。 首都圏外郭放水路の治水効果は、部分通水から約18年間で1484億円、完全通水から約12年間で1271億円の浸水被害を軽減している。平成27年9月の台風時には373億円、令和元年10月の台風時には264億円の被害軽減が確認されている。昭和57年9月の台風時と令和元年10月の台風時とを比較すると、浸水戸数は29,457戸から2,737戸へと約9割減少している。

		龍Q館は、首都圏外郭放水路の機能や役割を紹介する施設であり、多くの見学者が訪れている。見学者は工法や放水路のシステムなどを学び、洪水防御の技術や治水対策への理解が深まる。また、この大規模な治水施設は観光資源としても評価されており、地域の防災意識の向上にも寄与している。 **［考察］** 近年、地球温暖化による異常降雨などが頻発し、生命や財産に大きな被害をもたらす大規模な自然災害が増加している。本市も例外ではなく、2019年の台風19号による甚大な被害を経験している。このため、市街地の降雨時に調整池を設置するなど、より一層の対応が求められている。 中川・綾瀬川流域は、河川の高低差が非常に緩やかであり、一般的な流域治水では都市型水害を未然に防ぐことが難しい。首都圏外郭放水路は、この問題を解決するために建設された。トンネルは、地下40m以下の深度にあり、土地買収にかかる費用を圧縮し、関東ローム層を掘削することで効率的に施工された。 龍Q館は、首都圏外郭放水路の機能や役割を紹介する施設で、多くの見学者が訪れている。過去の災害や今後想定される水害について学び、防災意識の向上を図っている。この施設は観光資源としても評価されており、地域連携の良い例である。調圧水槽の地上は芝の広場として市民に解放されており、防災施設としての役割に加え、地域の生活環境にも寄与している。 今回の視察で得た知見をもとに、長野市でも水害対策を一層強化し、安全で安心なまちづくりを進める参考としたい。地下放水路のような大規模施設は現実的ではないが、遊水地の整備や調整池の設置など、市民の理解と協力を得ながら進めることが重要である。また、観光資源としての活用も視野に入れた取り組みを検討すべきである。 長野市も2019年の台風で甚大な被害を受けており、防災減災の重要性を痛感している。特に千曲川の支流の氾濫対策については、独自の水の逃げ道を確保することが重要である。ハザードマップや浸水シミュレーションを活用し、緊急性の高い地域から対策を講じる必要がある。 この視察を通じて、春日部市の先進的な治水対策を学び、長野市でも適用可能な事例を取り入れていくべきであると感じた。
5/15 （水）	大和市	**【文化創造拠点シリウスについて】** **［概要］** 大和市は神奈川県中央部に位置する市である。総人口は約24万人であり、東京都心から約40kmの距離にある。市内には小田急江ノ島線や相鉄本線などが通じており、交通の便が非常に良い地域である。また、市内には多くの緑地や公園が点在しており、自然環境も豊かである。 ・施設概要

		シリウスは地下1階、地上6階建ての複合文化施設で、小田急線大和駅から徒歩3分という好立地にある。この施設は、図書館、芸術文化ホール、生涯学習センター、屋内こども広場などを備えており、地域住民の文化活動や交流の拠点となっている。 ・建設の経緯 シリウスの建設は、相模鉄道の地下化計画により大和駅東側第4地区の再開発として開始された。当初は商業施設とマンションの複合開発が計画されていたが、リーマンショックにより計画が変更され、現在の文化創造拠点として整備された。 ・施設の詳細 1階: 1,007席の文化ホール、272席のサブホール、スターバックスが営業しており、新刊本や暮らしの本が並ぶエリア。 2階: 市民交流フロアで、歓談やビジネス利用が可能。電源や有線LANを備えたスペースがあり、市役所連絡所や観光協会も併設。 3階: 子どものフロア、保育室、無料のちびっこ広場、低料金のげんきっこ広場、相談室、こども図書館。 4階: 健康・医療に関する図書資料、開放的な屋外読書テラス。 5階: 静かな読書室、情報検索やレファレンスカウンター。 6階: 生涯学習センター、会議室、講習室、和室、調理実習室、創作活動用の部屋、市民交流スペースとテラス。 運営体制シリウスは指定管理者制度により、共同企業体「やまとみらい」によって運営されている。やまとみらいは、株式会社図書館流通センターを含む6社で構成されており、各社の専門分野を活かして効率的に運営されている。指定管理料は年間約10億6千万円で、5年間で総額53億円となっている。 ・利用状況と特徴 シリウスは年間363日営業しており、利用者は平日で1日平均約8,000人、開館から7年目で累計2千万人を超えている。来館者の約1/3は市外からの利用者である。利用者は、午前中は学生、午後は高齢者、夕方以降は勤め帰りの方が多い傾向がある。 シリウスは、地域の犯罪率の低下や駅周辺の活性化を目指して設立され、現在は市民の文化活動や交流の場として広く利用されている。また、複数の企業が協力して運営することで、多様なアイデアやサービスの提供が可能となり、利用者の満足度向上に寄与している。 **[考察]** 「文化創造拠点シリウス」は、解放感に溢れた空間が印象的であり、各施設の使用料金が安く、メインホールの稼働率が94%に達するなど、各施設の稼働率も軒並み80%以上となっている。特に2階には従来からあった神社が社殿前境内広場を含めて取り込まれており、市民交流や憩いの場として機能している。視察時は平日であったが、各フロアとも来館者に溢れていながらも静謐な雰囲気が保たれており、安心感を与える施設であった。 駅から徒歩3分という利便性の良さが稼働率の高さに直結してい

		る。入り口が駅方向に向けられているため、気軽に入りやすい工夫がされている。近くに高校が多くあることから、勉強のためのスペースも千席設けられており、利用者を大切にする姿勢が感じられた。図書の自動貸し出しシステムや自動返却システムなど、全館図書館というコンセプトをしっかりと作り上げている。 大和市の施設運営手法は、長野市の「もんぜんぷら座」改修や生涯学習センターの今後の在り方に大いに参考になると感じた。先に建物を作るのではなく、管理基本計画を作り、様々な検討や調整を行いながら建物を作る手法は有効である。市民参加を促し、行政側の丁寧な説明と市民を対等のパートナーとして事業者や市民に力を最大限発揮してもらう仕掛けが重要である。 指定管理者制度の導入により、民間ノウハウの活用が不可欠であり、図書館の運営管理やホール・イベントの管理運営、顧客サービス情報の集積活用、保育・育児・子育て相談への専門性発揮など、各分野の専門性と運営スキルが発揮されていることが、市民の居場所づくりに繋がっている。統括責任者の発言によると、建物は経年劣化していくが、そのマイナス分は指定管理者の工夫と努力で補っているという。アンケートによる顧客満足度が下がった際も、再度ワークショップで品質向上を図るなど、言葉が行動で担保されていることを実感し、指定管理者制度の意義を再認識した。 今回の視察を通じて、長野市においても、市民ニーズを反映した開かれた図書館づくりを目指し、専門の民間事業者を巻き込んでの開発を進めるべきであると考えた。シリウスの成功事例を参考にし、長野駅から徒歩圏内の好立地を活かし、図書館としての機能のみならず、市民が集えることを前提に、カフェや市役所出張所、管理栄養士による無料の食指導など、全世代に当てはまる仕掛けを取り入れるべきである。特に、こども広場での無料スペースや有料保育所などの斬新なアイデアは、長野市にも応用できると感じた。 平日にも関わらず、多くの来館者が訪れていることから、施設の魅力と市民の支持を感じた。これらの知見を長野市の施設運営に活かし、市民が利用しやすく、愛される施設づくりを目指すべきである。